



日本鐵鋼協會第 20 回講演大會通俗講演 (1)

我國鐵鋼業の展望

(日本鐵鋼協會第 20 回講演大會通俗講演昭和 13 年 10 月 16 日於大阪中央電氣俱樂部)

日本製鐵株式會社常務取締役 澁澤 正 雄

只今御紹介を得ました澁澤でございます、此の 20 回の大會の機會に、斯くも多數の權威者及び諸君と同じ部屋で以て極く座談的に我國の鐵鋼業の展望を申上げる機會を得ましたことは、私として非常に光榮でもありますし、同時に却て恐縮に考へる次第でございます、通俗講演と云ふお話でありますから、難かしく申せと仰しやられても出来ない、私に取ては寧ろ適當なのでありまするが、時間も段々に迫りまして、謂はゞ前座であります關係からして、時間も時計を見々適當の處で端折ります爲に或はお聞き洩らしの場合もあらうかと思ひます、此の段は御容赦を願ひたいと思ひます、實は麗々しく色んな圖表を此處に持て出ましたのは、前から種々會社に用意してあります表なのであります、恐らく話を申上げる時間が乏しいであらうと思ひましたので、表で以て以下説明に代へると云ふ調子に話をして行きたいと存じますから、どうぞ左様御承知を願ひたいと存じます。

日本の鐵鋼業と一口に申しますが、之はまあ神代の時代からあつた事は申すまでもない事實なのであります、古い歴史を持って居りますが科學的に進歩した近代の製鐵業の沿革と云ふやうなことになりますと、聊か其趣を異にしまして、日本では極く新しい工業と申して差支へないのぢやなからうかと思ひます。面白い挿話がありますから一寸申上げますと、丁度西曆 1866 年の頃、即我國では御維新の少し前、普佛戦争の以前であります、時の將軍の慶喜公の弟の民部公が、ナポレオン三世の招請に應じてフランスの大博覽會に參列する爲向ふへ行かれた。其際にベルギーへ寄てレオポルドと云ふ王様から方々の工業を見せて貰た、其中にリエージュの製鐵所を見せられたのであります、偶々其一行の中に私の父が若者として隨伴をして居たので、之は直話で聞いたのであります、當時民部公子はレオポルドの前へ出て色々と話をした時に、王様曰く、「それはいゝことをした、凡そ鐵を多く産する國は必ず富む、而して鐵を多く使ふ國は必ず強い、一國が富強にならんとするならば宜しく鐵を大いに産し大いに使ふべ

きであるが、まだお國は作ると云ふ處までは行くまいから精々鐵を餘計お使い下さい、さうして使ふなら他所の鐵を使はずにベルギーの鐵をお使ひなさい」と云て王様が宣傳をされたと云ふ話を聞きましたがそれがなにそんなに古い時代ではない、私共の生れる一寸前であります、其後に之は私一寸調べて見たのであります、日本の製鐵業としては、1880 年と申しますから明治 13 年であります、初めて釜石、今の日本製鐵の矢張り一工場になって居ります釜石の官營製鐵所が設けられて、直に取り止めになつてしまつた、續いて明治 29 年に日清戦争に刺戟されて海軍の吳工廠に初めて製鋼爐を置いた、又製鐵所の官制を布いた。之は大いに戰をするには鐵が要ると云ふことからして刺戟された結果と思はれるのであります、處が明治 34 年になってやつと八幡で以て出來ました鐵が、驚く勿れ僅かに 6,000 噸、之が 1 年の總生産額だつたさうであります。日露戦争になりましてからそれが 10 倍の 6 萬噸になり、續いて歐洲大戰の始まつた大正 3 年には更に其 5 倍の 30 萬噸になつた、段々増へては居りまするが、要するに其の程度であつたものが、大正 12 年にやつと 75 萬噸、之が日本の總生産額であります、今の丁度日本鋼管會社の生産額位のものが震災當時の全生産量であつたやうであります。その後世界的好況時代でありました 1929 年(昭和 4 年)鐵の産額の非常に多かつた年でありました事を、私共記憶して居りますが、大變に餘計出來たと云て僅かに 200 萬噸そこそこであつたのであります、それが直ぐに例の濱口内閣の緊縮政策に遭て不況を重ねました昭和 6 年には、166 萬噸と又 200 萬噸を割たのであります、さう云たやうな足取りをしまして、遂に製鐵合同の出來ました昭和 9 年、大いに今後は豊富且低廉な鐵鋼を供給するのだと云て臨んだ合同の時が 320 萬噸そこそこであつたのであります。處が其後に更に進んで丁度私が一昨年春パリーで開かれました國際鐵鋼カルテルの時にオヴザーバーの一人として出たのであります、其當時の即ち昭和 11 年頃の噸數が約 400 萬噸

特表

第 1 表 世界主要製鐵國銑鐵生産高調 (單位千噸)

國別 年別	世界 合計	日 本	米 國	獨 逸	露 國	英 國	佛 國	白 耳 義	ル ク セ ン グ	伊 太 利	印 度	滿 洲
明治34年 (1901)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
明治36年 (1903)	47,200	30 ⑥	18,300 ①	10,000 ②	2,400 ⑤	9,100 ③	2,800 ④	—	—	—	—	—
大正2年 (1913)	78,698	240 ⑧	31,143 ①	19,304 ②	4,558 ⑤	10,424 ③	5,208 ④	2,467 ⑥	—	427 ⑦	—	—
大正12年 (1923)	69,342	700 ⑦	40,666 ①	4,935 ④	528 ⑨	7,559 ②	5,432 ③	2,189 ⑤	1,406 ⑥	247 ⑩	548 ⑧	98 ⑪
昭和4年 (1929)	97,746	1,241 ⑨	42,946 ①	13,398 ②	3,972 ⑥	7,701 ④	10,361 ③	4,094 ⑤	2,906 ⑦	729 ⑩	1,372 ⑧	295 ⑪
昭和5年 (1930)	79,749	1,312 ⑨	31,944 ①	9,693 ③	5,012 ⑤	6,296 ④	10,032 ②	3,393 ⑥	2,473 ⑦	578 ⑩	1,199 ⑧	349 ⑪
昭和6年 (1931)	55,635	1,065 ⑨	18,555 ①	6,061 ③	4,877 ④	3,818 ⑤	8,197 ②	3,231 ⑥	2,052 ⑦	541 ⑩	1,059 ⑧	342 ⑪
昭和7年 (1932)	39,871	1,173 ⑧	8,813 ①	3,933 ④	6,204 ②	3,630 ⑤	5,535 ③	2,783 ⑥	1,960 ⑦	488 ⑩	925 ⑨	368 ⑪
昭和8年 (1933)	49,308	1,598 ⑧	13,434 ①	5,266 ④	7,187 ②	4,190 ⑤	6,323 ③	2,744 ⑥	1,888 ⑦	553 ⑩	1,082 ⑨	434 ⑪
昭和9年 (1934)	62,519	1,939 ⑧	16,234 ①	8,740 ③	10,437 ②	6,065 ⑤	6,150 ④	2,906 ⑥	1,999 ⑦	573 ⑩	1,352 ⑨	476 ⑪
昭和10年 (1935)	73,853	2,118 ⑦	21,377 ①	12,839 ②	12,610 ③	6,527 ④	5,787 ⑤	3,059 ⑥	1,871 ⑧	666 ⑩	1,459 ⑨	608 ⑪
昭和11年 (1936)	91,053	2,217 ⑦	31,191 ①	15,545 ②	14,224 ③	7,823 ④	6,172 ⑤	3,190 ⑥	1,996 ⑧	762 ⑩	1,585 ⑨	633 ⑪
昭和12年 上半期	52,688	1,277 ⑧	20,023 ①	7,710 ②	7,098 ③	4,075 ④	3,819 ⑤	1,859 ⑥	1,304 ⑦	355 ⑩	830 ⑨	336 ⑪
昭和12年 (1937)	104,449	⑧	37,199 ①	15,955 ②	14,521 ③	8,632 ④	7,917 ⑤	3,841 ⑥	2,512 ⑦	790 ⑩	1,669 ⑨	762 ⑪
昭和13年 上半期	39,677	⑥	7,999 ②	8,803 ①	7,226 ③	4,069 ④	3,178 ⑤	1,203 ⑦	716 ⑨	395 ⑩	864 ⑧	400 ⑪

第 2 表 世界主要製鐵國鋼塊 (鑄鋼を含む) 生産高調 (單位千噸)

國別 年別	世界 合計	日 本	米 國	獨 逸	露 國	英 國	佛 國	白 耳 義	ル ク セ ン グ	伊 太 利	印 度	滿 洲
明治34年 (1901)	31,050	6	13,686	6,137	2,215	4,979	1,422	518	254	305	0	—
明治36年 (1903)	36,080	40	14,763	8,423	2,418	5,111	1,839	965	376	335	0	—
大正2年 (1913)	76,602	255	31,802	17,598	4,836	7,787	4,688	2,467	1,331	933	0	—
大正12年 (1923)	78,427	959	45,663	6,303	732	8,618	5,109	2,286	1,200	1,118	218	—
昭和4年 (1929)	119,848	2,294 ⑧	56,540 ①	16,242 ②	4,901 ⑤	9,809 ③	9,697 ④	4,131 ⑥	2,701 ⑦	2,143 ⑩	589 ⑨	—
昭和5年 (1930)	94,415	2,289 ⑦	40,922 ①	11,536 ②	5,639 ⑤	7,416 ④	9,445 ③	3,374 ⑥	2,270 ⑧	1,774 ⑨	630 ⑩	—
昭和6年 (1931)	69,173	1,883 ⑧	26,040 ①	8,290 ②	5,348 ④	5,262 ⑤	7,820 ③	3,122 ⑥	2,034 ⑦	1,453 ⑨	635 ⑩	—
昭和7年 (1932)	50,673	2,398 ⑦	13,716 ①	5,769 ③	5,884 ②	5,341 ⑤	5,639 ④	2,808 ⑥	1,956 ⑧	1,391 ⑨	579 ⑩	—
昭和8年 (1933)	67,792	3,203 ⑥	23,526 ①	7,584 ②	6,854 ④	7,115 ③	6,530 ⑤	2,721 ⑦	1,814 ⑧	1,783 ⑨	705 ⑩	—
昭和9年 (1934)	81,716	3,903 ⑥	26,125 ①	11,913 ②	9,563 ③	8,992 ④	6,172 ⑤	2,947 ⑦	1,931 ⑧	1,849 ⑨	811 ⑩	—
昭和10年 (1935)	99,574	4,800 ⑥	34,638 ①	16,443 ②	12,517 ③	10,017 ④	6,276 ⑤	3,027 ⑦	1,837 ⑧	2,210 ⑨	876 ⑩	137 ⑪
昭和11年 (1936)	125,256	5,310 ⑥	48,849 ①	19,609 ②	16,256 ③	11,887 ④	6,690 ⑤	3,170 ⑦	1,991 ⑧	2,286 ⑨	955 ⑩	344 ⑪
昭和12年 上半期	70,961	2,963 ⑥	29,221 ①	9,547 ②	8,750 ③	6,440 ④	3,933 ⑤	1,871 ⑦	1,324 ⑧	1,073 ⑨	470 ⑩	187 ⑪
昭和12年 (1937)	135,105	⑥	19,297 ①	50,303 ②	17,824 ③	13,173 ④	7,903 ⑤	3,870 ⑦	2,510 ⑧	2,087 ⑨	928 ⑩	451 ⑪
昭和13年 上半期	52,014	⑤	10,994 ②	11,025 ①	9,343 ③	6,023 ④	3,230 ⑥	1,087 ⑧	682 ⑨	1,128 ⑦	483 ⑩	320 ⑪

備考 昭和12年以降は國際聯盟統計月表に依る。

昭和13年上半期に於て露西亞の5月6月分及印度の6月分は推定數字なり。

○内の數字は生産高等級を示す。



63

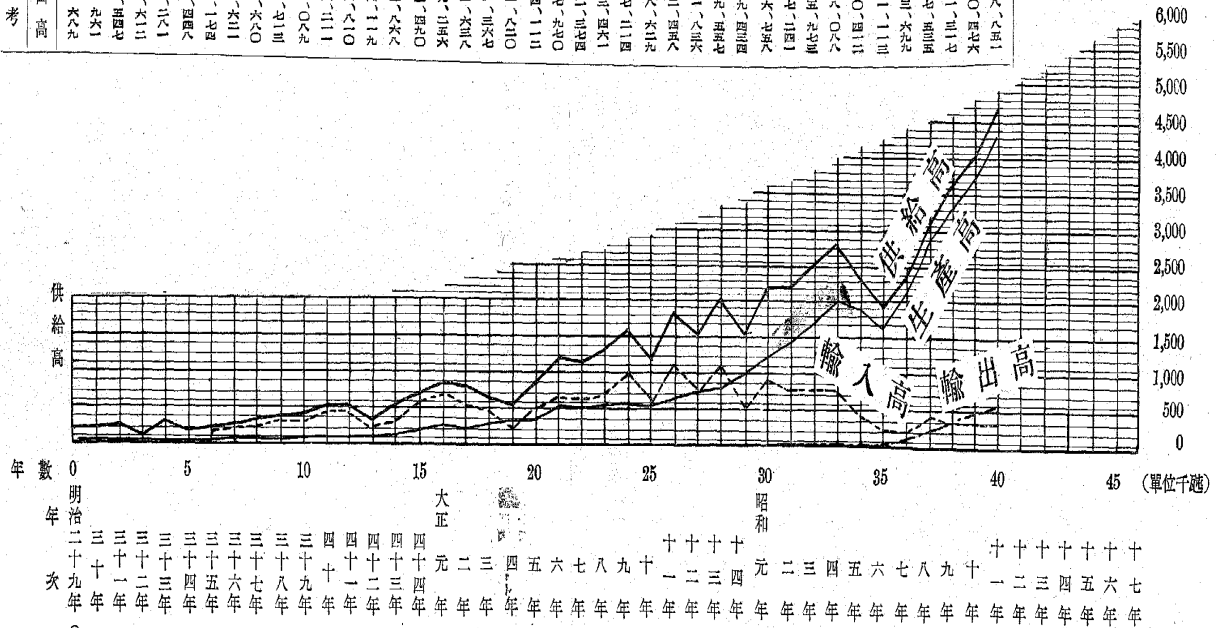
で、フランス邊りから見ますと二百數十萬噸下位にありますから、謂はば我々は小さくなって居た譯でありまして、其表は此處にございますから、之を御覽頂けば凡そどんな事情かと云ふことがお分りであらうと思ひます、まあ斯う云ふやうな次第で、日本の鐵業が徐々に發達をしまして、遂に昨年及び今年になりまして夥しい數になつたのでありますが、之は生憎と一寸差止められて居りますから具體的な數字は申上げられませんが、10年前を顧みましても、殆ど2倍半と云ふか3倍と云ふか大きな數字になつたことは、全く斯業に従事して居ります私共でも隔世の感じがしてならぬのであります、定めし一般の皆さんも近頃は大部分鐵が増へたんだと云ふ御認識があらうと存じます、斯う云ふ風にして鐵が段々に増へて參たのであります、此表にありますやうに、然らば日本が世界の製鐵國として何番目であるか、先程申したレオポルドの、大いに鐵を産しなければ世界の富強國にはならぬのだと云はれた時代から約70年経た今日、どの位な順位にあるかと云ふことは、此處にありますやうに此方が銑鐵の製造(第1表)であります、まだまだ日本はアメリカ、ドイツ、ロシア、イギリス、フランス、ベルギー、ルクセンブルグ、此次である第8位に今日まであつたのであります、今年の豫想は一寸それを上りまして或はルクセンブルグとベルギーを追い越すのではないかと、但し此追い越し方は日本が進んだ點も多少ありますが、フランス、イタリー、ベルギーとルクセンブルグが非常に落ちたのであります、向ふがまづかつたと云ふので餘り自慢にはならぬのであります、それから此の鋼塊の數字(第2表)であります、之もこつちの方は一寸發表することが出来ぬ數字であります、矢張り日本の位置と云ふものは僅かに全世界の5%、4%半と云ふやうな非常に尠い割合を示して居りますが、それでも昨年邊りの順を申しますと、世界で一番大きいのはアメリカ、其次はドイツ、それからロシア、イギリス、フランス、其次はもう既にベルギー、ルクセンブルグを遙かに引き離して第6位が日本と、斯う云ふ風な處まで進んで參たのであります、尤も残念なことには、此表を見て御覽の通りに、銑鐵の生産に比較して非常に鋼が餘計出来て居ることは何を意味するかと云ふと、御承知の通りにアメリカから多量のスクラップアイアンを輸入して居ります、アメリカの商人は、斯んなに屑鐵を日本に餘計運んだら、あの小さな島國が沈んでしまひやしはしないかと冗談を言ふ位多くのスクラップアイアンを買付けて

居ります、其結果、所謂一貫作業に非らざる平爐からスタートした工場の簇出と申しますが、それは今日の製鋼事業を見場の上に於て非常な躍進に導いて居るので、どうしても我々も少し銑鐵の製造に力を入れねばならぬ、熔鑪の擴充を圖らねばならぬと斯う考へるのは、是等の表から御覽になつて一目瞭然でございます、今其缺陷を補ふ爲に新聞等にぼつぼつ見えて居りますから皆さんの御關心を買たかも知りませんが、日滿支を通ずる5ヶ年計畫もう最初の年は済みまして、残るは13、14、15、16と4ヶ年を餘して居るのみであります、3ヶ年半と申した方がいゝのかも知りませんが、それに依りまして此の日滿支を通し、若し諸外國が現状であるとするならば、フランスを悠に追ひ越してイギリスとすれすれの處まで押し寄せやうと云ふ計畫なのであります、果して之が16年の終りに完全出来るや否やこれは將來に屬すること、又我々の使命も相當に重且大であると斯う考へざるを得ないのであります、まあさう云ふ風な次第でありまして、日本が製鐵國としての位置が、歐米の諸國に較べてさまで落ちて居らない事、又もう一つ面白いことは、アメリカが常に世界の全生産額の4割とか4割5分とか云ふものを占めた數字で來て居たのであります、それが今年の上半期中にドイツに追ひ抜かれた、ドイツが半期で以て1,100萬噸を作つてゐるのに、片つ方は1,099萬噸、僅かな違ひではあります、兎にも角にもドイツが世界第一の製鐵國になりました、下半期には恐らく又ドイツに抜かれるのぢやないかと豫想されますが、兎に角我々防共協定の一國が世界の第一位になつたと云ふことは、洵に痛快な事實でございます、次に我國が唯今まで述べて來た様な大きな製鐵國として將來も適する國であるかどうかと云ふ御疑問が皆さんにあらうと思ひますが、簡単に答へるなら最も適せる國の一つであると存じます、尤も私が斯様に申すと、あれは日本製鐵の者だからあゝ云ふのではないかと云ふやうな誤解が起るか知れませんが、この際私は國民の一人とし、製鐵業を知て居ります者としてはつきり申上げて差支へない、何れ後で伍堂さんからも裏書をつけて頂けるのではないかと考へて居ります、凡そ製鐵事業を論ずる人々の中に、能く製鐵と資源と云ふ關係に於て、口癖のやうに日本は資源が乏しい、滿洲は資源が豊富だと云ふやうなことを慢然と口にするのであります、果して國內に資源と云ふものがなければ製鐵が發達しないのだと云ふことを若し申しますなら此の表(第3表)を御覽頂きたい、フランスは如何でござ

物表

第3圖 本邦鋼材供給高曲線圖 (朝鮮、臺灣を含む)

供給高	生産高	輸入高	輸出高
121,110	11,910	110,200	6,900
131,110	12,000	119,110	7,000
141,110	13,000	128,110	7,100
151,110	14,000	137,110	7,200
161,110	15,000	146,110	7,300
171,110	16,000	155,110	7,400
181,110	17,000	164,110	7,500
191,110	18,000	173,110	7,600
201,110	19,000	182,110	7,700
211,110	20,000	191,110	7,800
221,110	21,000	200,110	7,900
231,110	22,000	209,110	8,000
241,110	23,000	218,110	8,100
251,110	24,000	227,110	8,200
261,110	25,000	236,110	8,300
271,110	26,000	245,110	8,400
281,110	27,000	254,110	8,500
291,110	28,000	263,110	8,600
301,110	29,000	272,110	8,700
311,110	30,000	281,110	8,800
321,110	31,000	290,110	8,900
331,110	32,000	299,110	9,000
341,110	33,000	308,110	9,100
351,110	34,000	317,110	9,200
361,110	35,000	326,110	9,300
371,110	36,000	335,110	9,400
381,110	37,000	344,110	9,500
391,110	38,000	353,110	9,600
401,110	39,000	362,110	9,700
411,110	40,000	371,110	9,800
421,110	41,000	380,110	9,900
431,110	42,000	389,110	10,000
441,110	43,000	398,110	10,100
451,110	44,000	407,110	10,200
461,110	45,000	416,110	10,300
471,110	46,000	425,110	10,400
481,110	47,000	434,110	10,500
491,110	48,000	443,110	10,600
501,110	49,000	452,110	10,700
511,110	50,000	461,110	10,800
521,110	51,000	470,110	10,900
531,110	52,000	479,110	11,000
541,110	53,000	488,110	11,100
551,110	54,000	497,110	11,200
561,110	55,000	506,110	11,300
571,110	56,000	515,110	11,400
581,110	57,000	524,110	11,500
591,110	58,000	533,110	11,600
601,110	59,000	542,110	11,700
611,110	60,000	551,110	11,800
621,110	61,000	560,110	11,900
631,110	62,000	569,110	12,000
641,110	63,000	578,110	12,100
651,110	64,000	587,110	12,200
661,110	65,000	596,110	12,300
671,110	66,000	605,110	12,400
681,110	67,000	614,110	12,500
691,110	68,000	623,110	12,600
701,110	69,000	632,110	12,700
711,110	70,000	641,110	12,800
721,110	71,000	650,110	12,900
731,110	72,000	659,110	13,000
741,110	73,000	668,110	13,100
751,110	74,000	677,110	13,200
761,110	75,000	686,110	13,300
771,110	76,000	695,110	13,400
781,110	77,000	704,110	13,500
791,110	78,000	713,110	13,600
801,110	79,000	722,110	13,700
811,110	80,000	731,110	13,800
821,110	81,000	740,110	13,900
831,110	82,000	749,110	14,000
841,110	83,000	758,110	14,100
851,110	84,000	767,110	14,200
861,110	85,000	776,110	14,300
871,110	86,000	785,110	14,400
881,110	87,000	794,110	14,500
891,110	88,000	803,110	14,600
901,110	89,000	812,110	14,700
911,110	90,000	821,110	14,800
921,110	91,000	830,110	14,900
931,110	92,000	839,110	15,000
941,110	93,000	848,110	15,100
951,110	94,000	857,110	15,200
961,110	95,000	866,110	15,300
971,110	96,000	875,110	15,400
981,110	97,000	884,110	15,500
991,110	98,000	893,110	15,600
1,001,110	99,000	902,110	15,700



明治二十九年 (一八九六) 吳海軍兵器製造所にて本邦最初の石炭を用ゆる平爐製鋼法開始
 歴史重要事項

三十八年 ポーツマス和約
 三十九年 日露開戦
 四十一年 日英同盟
 四十二年 八幡製鐵所作業開始
 四十四年 北清事變

大正
 元 (一九一) 支那中華民国と改む
 二 支那革命、信州土橋製鋼所にて本邦最初の電氣爐製鋼法開始、南洋洲鐵鏡利
 三 支那革命、信州土橋製鋼所にて本邦最初の電氣爐製鋼法開始、南洋洲鐵鏡利
 四 支那革命、信州土橋製鋼所にて本邦最初の電氣爐製鋼法開始、南洋洲鐵鏡利
 五 支那革命、信州土橋製鋼所にて本邦最初の電氣爐製鋼法開始、南洋洲鐵鏡利
 六 支那革命、信州土橋製鋼所にて本邦最初の電氣爐製鋼法開始、南洋洲鐵鏡利
 七 支那革命、信州土橋製鋼所にて本邦最初の電氣爐製鋼法開始、南洋洲鐵鏡利
 八 支那革命、信州土橋製鋼所にて本邦最初の電氣爐製鋼法開始、南洋洲鐵鏡利
 九 支那革命、信州土橋製鋼所にて本邦最初の電氣爐製鋼法開始、南洋洲鐵鏡利
 十 支那革命、信州土橋製鋼所にて本邦最初の電氣爐製鋼法開始、南洋洲鐵鏡利
 十一 支那革命、信州土橋製鋼所にて本邦最初の電氣爐製鋼法開始、南洋洲鐵鏡利
 十二 支那革命、信州土橋製鋼所にて本邦最初の電氣爐製鋼法開始、南洋洲鐵鏡利
 十三 支那革命、信州土橋製鋼所にて本邦最初の電氣爐製鋼法開始、南洋洲鐵鏡利
 十四 支那革命、信州土橋製鋼所にて本邦最初の電氣爐製鋼法開始、南洋洲鐵鏡利
 十五 支那革命、信州土橋製鋼所にて本邦最初の電氣爐製鋼法開始、南洋洲鐵鏡利
 十六 支那革命、信州土橋製鋼所にて本邦最初の電氣爐製鋼法開始、南洋洲鐵鏡利
 十七 支那革命、信州土橋製鋼所にて本邦最初の電氣爐製鋼法開始、南洋洲鐵鏡利
 十八 支那革命、信州土橋製鋼所にて本邦最初の電氣爐製鋼法開始、南洋洲鐵鏡利
 十九 支那革命、信州土橋製鋼所にて本邦最初の電氣爐製鋼法開始、南洋洲鐵鏡利
 二十 支那革命、信州土橋製鋼所にて本邦最初の電氣爐製鋼法開始、南洋洲鐵鏡利

昭和
 元 (一九二六) 關稅定率法改正
 二 關稅定率法改正
 三 關稅定率法改正
 四 關稅定率法改正
 五 關稅定率法改正
 六 關稅定率法改正
 七 關稅定率法改正
 八 關稅定率法改正
 九 關稅定率法改正
 十 關稅定率法改正
 十一 關稅定率法改正
 十二 關稅定率法改正
 十三 關稅定率法改正
 十四 關稅定率法改正
 十五 關稅定率法改正
 十六 關稅定率法改正
 十七 關稅定率法改正
 十八 關稅定率法改正
 十九 關稅定率法改正
 二十 關稅定率法改正

關東大震災
 ワシントン軍縮會議、南洋馬來半島の鐵鑛採掘開始、關稅定率法改正
 世界大戰休止、臨時經濟調查會設置
 製鐵業獎勵法制定、金輸出禁止
 日本鐵鋼協會成立
 鐵鋼輸入社總、鐵價暴騰、製鐵製鋼會社盛に設立さる、製鐵業調查會設置、
 世界大戰開始

關稅定率法改正、滿洲國成立
 金輸出禁止、ロンドン軍縮會議
 金輸出解禁、ロンドン軍縮會議

近代製鐵鋼業上の事蹟

- 享保十二年 (1727年) 金石の鐵鑛發見
- 享保二十年 (1735年) 英人ダービー氏溶鐵爐に散炭使用開始
- 嘉永六年 (1853年) 江川氏伊豆龜山に反射爐を築造
- 安政三年 (1856年) 英人ベセマー氏轉爐製鋼法を發明
- 文久元年 (1861年) 英人シーメンス氏蓄熱式反射爐を完成
- 元治元年 (1864年) 佛人マルタン氏シーメンス爐を使用し平爐製鋼法を完成
- 明治五年 (1875年) 京濱間に本邦最初の鐵道開通
- 明治十一年 (1878年) 英人トーマス氏及ジルクライスト氏鹽基性轉爐製鋼法を發明し續て平爐にも鹽基性を用ふ
- 明治十三年 (1880年) 釜石製鐵所官設され本邦最初の洋式溶鐵爐開始
- 明治十四年 (1881年) 築地海軍製鐵所にて本邦最初の坩堝製鋼法開始
- 明治廿三年 (1890年) 支那大冶鐵山發見さる、横須賀海軍造船廠にて本邦最初の重油を燃料とする平爐製鋼法開始
- 明治廿五年 (1892年) 農商務省に製鋼事業調査委員會設置
- 明治卅二年 (1899年) 米人タルボット氏タルボット連續製鋼法を開始



第 3 表

自昭和 7 年 至同 11 年 世界主要製鐵國鐵鑛需要高調 (5ヶ年平均)

國 別	摘 要	需 要 高 (千噸)	需 要 高 に 對 する 割 合 (%)		
			國 内 生 産	輸 入	輸 出
日 本	本 國	4,990	29.2	70.8	0
獨 逸	本 國	11,494	29.5	70.8	0.3
英 國	義 及 國	11,276	29.5	75.6	5.1
米 國	白 耳 義 及 國	11,570	71.7	28.3	—
佛 露	露 國	22,988	96.7	4.9	1.6
	露 國	14,903	173.7	3.0	76.2
	露 國	20,993	100.2	0	0.2

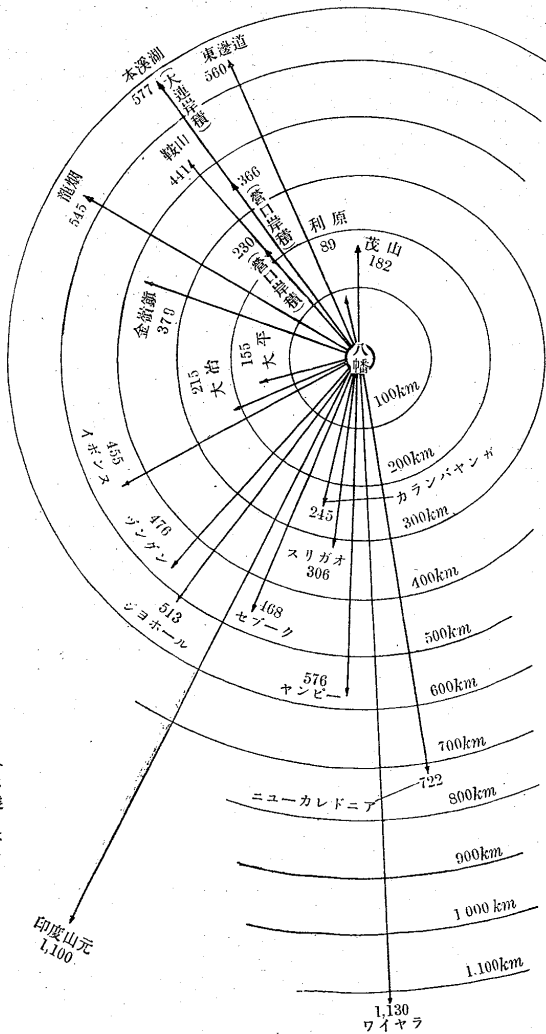
第 4 表 人口 1 人 當 り 鋼 材 需 要 高 (昭 和 12 年)

國 別	種 別	人 口 1 人 當 り 鋼 材 需 要 高	
		數 量	比 率
日 本	本 國	73kg	100
米 國	本 國	258	353
獨 逸	本 國	177	243
英 國	本 國	172	236
佛 露	本 國	93	127
白 耳 義 及 露 國	義 及 露 國	132	181
	露 國	80	110

備考 米, 英, 佛は本國, 日本は内地。

第 1 圖

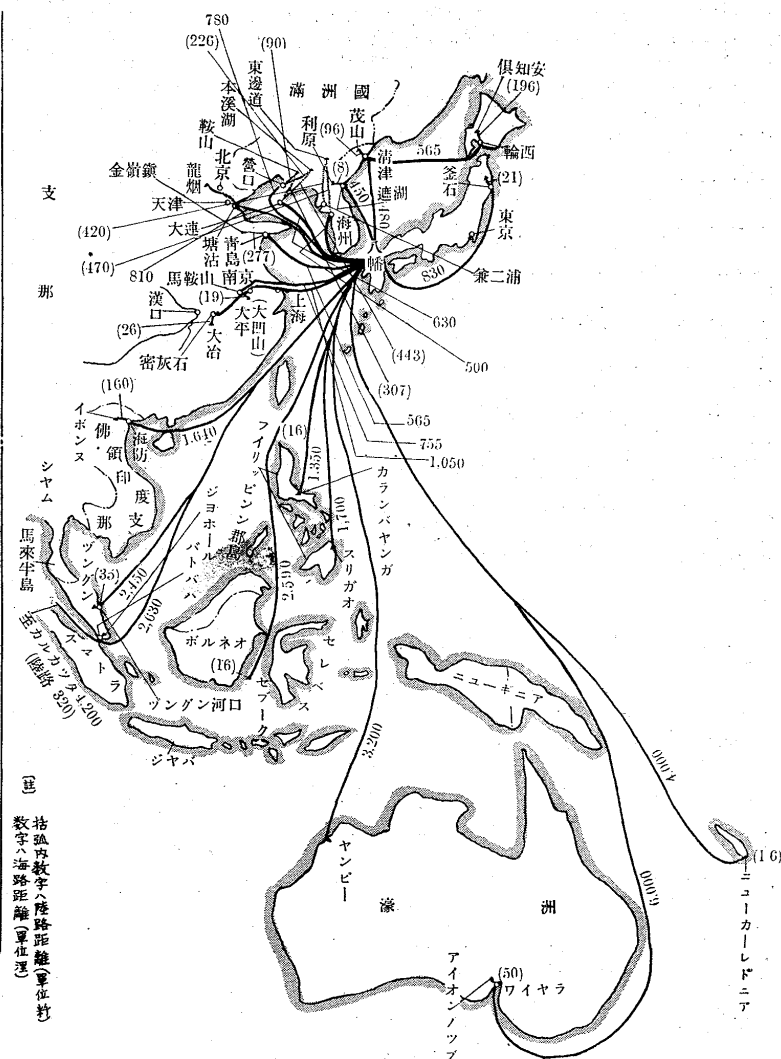
主要 鐵 鑛 石 輸 送 距 離 比 較 圖



全距離ヲ示セリ
海路十料ノ陸路一料ニ換算シテ

第 2 圖

主要 鐵 鑛 石 輸 送 距 離 略 圖



括弧内數字ハ陸路距離(單位打
數字ハ海路距離(單位打)

いますか、鐵鑛石の國內出量は 173.7% と云ふ數字を示し、外國に 76.2 を輸出してゐるのですがそのフランスが製鐵國として現在此の状態である、僅かに國內生産は 29.5, % 即ち日本の 29.2% と相離る遠くない、國內産出をして居るドイツが世界第一の生産國になつたと云ふ事實を御覽になれば、所謂資源を國內に持たないと云ふことが、特に戦時状態で外國の政治工作、經濟工作に依て拒まれてゐる時は之はいざ知らず、少くも平時製鐵資源を國內に持たないと云ふことに依て、製鐵業が出来る出来ないと云ふやうな結論になることはないことを、特に此の(第 1 表, 第 3 表) 圖表に依て明かに御認識を願ひたいと考へるのであります。現に此平時の状態に於きまして八幡を中心にする日本の持てるヒンターランドとでも申しますか、それを圖表(第 1 圖)にしたのであります、之が八幡であります、遠くは濠洲の 6,000 海里もあるのであります、ニュージーランド 4,000 何百海里、印度 4,200 海里



と云たやうな風の距離を持って居りますが、之をです、此の圖を見てすぐ遠い處から資源を持って來るのだと云ふ誤解を持って頂きたくない、其爲に特に私がこつちの圖を作て見た、此の圖(第2圖)は或る方に聞きますと、海路の10キロを陸路の1キロに換算するとしてもまだ足らん、ものに依るともつと違へて考へても宜いのだと、即ち水の上からは假に1匁1厘で運べるものは1錢かゝと云ふよりは1錢5厘も2錢もものに依るとかゝる、であるから1/20と思つても宜いと云ふことを云はれますが、また其議論は別に致しまして、10倍と假定しまして、例へば大冶であるとか大平と云ふやうな極く150キロとか250キロ、丁度大阪を中心とすると岐阜であるとか名古屋であるとか云ふやうな處に豊富な鐵鑛石の資源があるのと相當する、名古屋に鑛石が出るから大阪で工場を持つのだと斯う申しましたならば皆さんは必ずそれは資源が近いから是非やつたらどうかと云ふことを仰しやるであらうと思ひます、まあそれ程に資源と云ふものは、經濟距離に依て支配されるので、唯地理的の圖の上に現はれて來る距離に依て支配されるものに非ずと云ふことを特に申上げて置きたい、近頃東邊道と云ふやうなことを能く申しますが、東邊道を圖にして見ますと此處であります、大冶が此處であります、資源と云ふものはさう云ふ關係にあると云ふことを特に私は申上げて置きたいと存じます、然らば其諸外國とどんな比例かと云ふことになりますと、之は曾て野田鶴雄君から貰た數字を其儘受け賣りをするのでありますが、ドイツとアメリカと日本と此の三つが、それぞれ或はシンガポール地方、或はフィリッピン、濠洲或は支那と云ふ方面から日本は持て來、ドイツはスペインのビルバオから積み出すとか、或はスエーデンのキルナバルから持て來るとか、アメリカは五大湖のずつと北の方から持て來ると云ふやうな標準で、それぞれピツグバーグ、及びエツセン、及び八幡と云ふやうなものを中心にして今の10倍宛の計算にして見まして、細かい數字は省きますが、總量に於て日本が3,573キロ、ドイツが3,372キロ、アメリカが4,175キロ、即ちドイツと日本は殆ど似たり寄たりの經濟距離、それから一寸500キロを引き離してアメリカがある、即ちヒンターランドから云へば日本とドイツが一番優勢だとかう申せるのだと云ふ數字であります、之は權威ある數字として私は今以て手元控へて居る其儘を寫して參たのであります、更にもつと分り能く之をお金で勘定して申しますと、日本が昭和

11年、12年に拂ひ出しました鑛石代金が幾程あるか、一寸4,000萬圓、之が偶然に兩年とも同じ數字でありまして4,000萬圓しか拂て居りません、其4,000萬圓の數字はどうかと申しますと、それから先の金額を申すと匁數が分る爲に一寸申上げられないのであります、約其10倍であるとか、ものに依たら15倍、20倍と云ふ大きさです、全體の中の僅かに4,000萬圓、それが鐵の鑛石に拂たもので、其残りの10數倍と云ふものは他の物資、例へばスクラップアインアであるとかクロムであるとか云ふものゝ輸入の爲に使たお金だと云ふことを御覽になりまして、如何に鐵鑛石と云ふものがそれを獲得する上に大きな要素でないのだ、鐵鑛石は生産費のコストの僅かな部分しか構成しないのだと云ふ御認識を持って御安心下さい、但し之には海軍力と云ふものを相當に背後に考へる必要は無敵であらうと思ひますが、無敵海軍を持つ日本として、四面海を環らす日本として何等の考慮も置かんでも宜しいのぢやないかと、斯う考へる次第であります、殊に此の大阪をお考へ下されば、鐵よりはすつと割合の悪い棉花を輸入して之を加工して、さうして海外に輸出して世界を制覇して居る紡績業の状況を見れば、僅か1/10位の値の物を輸入して、さうしてそれを加工して出すことが、世界制覇の上に當然すぎる位明なる事は私が申上げるまでもないのであります。

それから次に一體鐵は用途別にしてどんな風に使はれて居るかと云ふことを此處に出したのであります、之は内

第5表 本邦内地壓延鋼材用途別消費數量調(單位千噸)

用途別	昭和7年		昭和8年		昭和9年		昭和10年		昭和11年	
	數量	割合	數量	割合	數量	割合	數量	割合	數量	割合
鐵道(電鐵を含む)	232	10.6	212	7.9	319	10.5	255	8.1	281	7.9
土木建築鐵骨構造	621	28.4	731	27.1	792	26.0	846	26.9	1,198	31.9
造船	159	7.3	276	10.3	330	10.8	321	10.2	567	15.1
機械鐵工業	662	30.3	1,006	37.5	1,003	32.9	1,000	34.7	886	23.5
石油ガス水道	60	2.8	133	4.9	70	2.3	80	2.6	188	5.0
鑛山	38	1.7	65	2.4	130	4.3	71	2.2	96	2.5
其他	413	18.9	266	9.9	404	13.2	482	15.3	545	14.5
合計	2,185	100	2,692	100	3,048	100	3,145	100	3,761	100

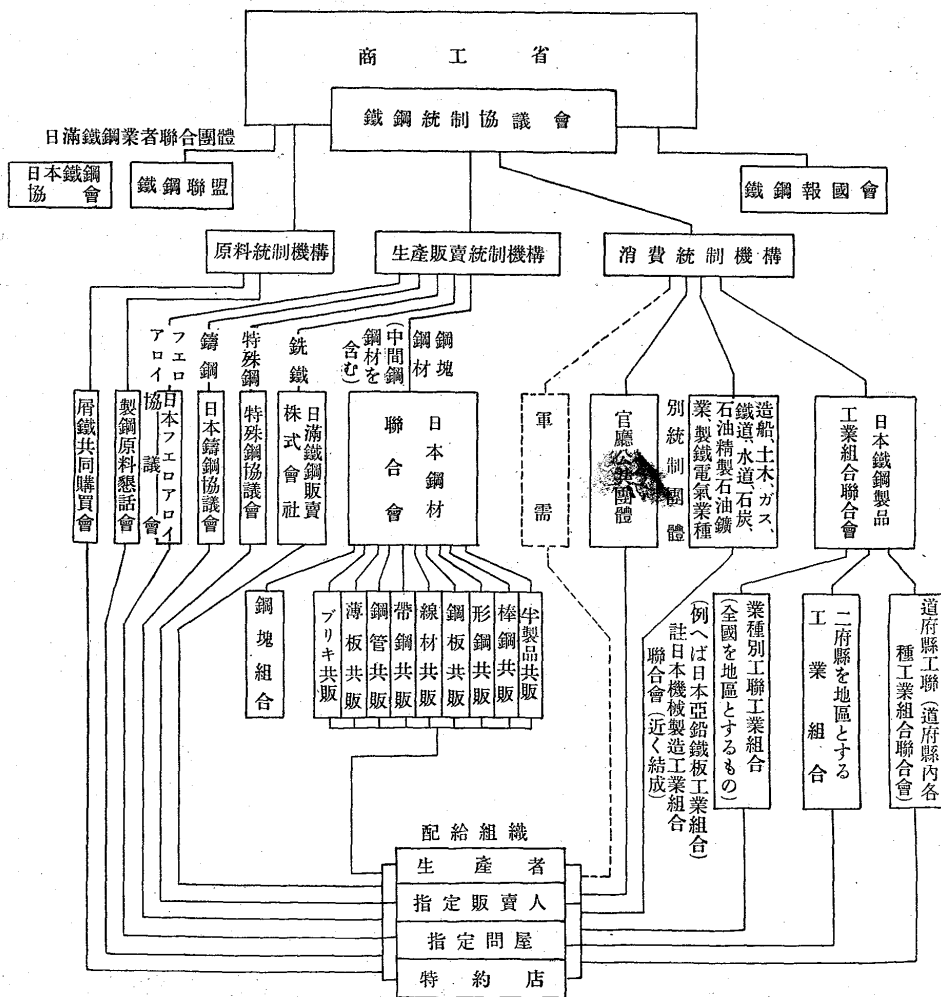
地の壓延鋼材だけの用途別であります、匁數が11年で376萬匁と云ふのが匁數になつて居りますが、之は内地の壓延鋼材と云ふことを頭に置いて考へて頂きたいと思ひますが、割合だけが一寸御参考になると思つて出したのであります、日本では何と申しても土木建築が31%で一番大きい一つの消費者であります、次に機械鐵工業、其次が造船業、それから鐵道、それから水道工事と云たやうな割合に分布されて居りますが、此點に付て私は最近に



アイオンエーヂに出て居りました前のユー.エス.コーポレーションの會長であつたミロンテラー氏の論説を読んだことがあつて、非常に面白いと思つて今以て記憶して居るのでありますが、それはミロン.テラー氏が10年間ユー.エス.スチールの仕事をやつたことがあります、辭めてからの感想に曰く、どうも龐大な大會社の弊として兎角重役が平常其日暮しをやりたがる其結果遂に先きの用途別の製品の見透しと云ふものをつけなかつた爲に大型物と云ふやうな従來の惰性に引摺られて其方に力を注いだ結果、遂に弱少と心得た他の工場からやられて、即ち薄板殊に一貫作業に依る薄板の方面と特殊鋼の方面と、要するに自動車の工業が發達すると云ふ大きな用途を見落した結果、甚だしくユー.エス.スチールが他の小さい會社に對して困難な立場に置かれたことを茲に告白するのだと云ふことを云て居りますが、我國でも如何に會社と申しますか大きな計畫の本を握て居られる企劃院と云ひますか何か知りませんが、さう云ふ處を定めます將來の見透と云ふものが、うまいとまづいで大きな結果を起すものであると云

ふことを御参考に供した次第でありまして、私もどうも何んとなしにミロンテラー氏から云はれたからでありませんが、今後伸び行く工業、即ち自動車の工業と云ふやうなもの、鋼材、即ち今後薄板工業、さう云ふ方面に伸びて行くことが必要なのではないかと、斯んな風に考へられる次第であります、それから毎日の業務として當て居りますのは——今までの申上げたことはほんの前置なので、實は此のことに關して主に當て居るのでありますが、此のものが足らなくなつた結果、配給と云ふ問題に付て政府初め民間でも非常に心配をしまして、今日では喧しい切符制度それが爲に大阪地方では随分色々の御迷惑なり珍談等が飛んで出て居るやうであります、之に對して私も前から此の配給と云ふ問題は考へて居たのでありますが、丁度古く申せば大正14年に初めて鐵鋼協議會と云ふ會が出来まして、今日の鐵鋼聯盟の前身であります、其會が出来まして、續いて官民分野協定會、之は今日の八幡製鐵所に、我々民間の工場が打ち寄て、如何にして猫の首に鈴をつけるかと云ふ惡口を蒙た會合なのであります、さう云ふ會合が出来たのであります、續いて關東に關東三社の

第 6 圖



共販組合、鋼管會社と釜石、富士の三つで以てそれを作た、それから六社の之は西の方の三社がそれに加はつて、鋼材聯合會と云ふので以て共販組織を作りました、併し何れも品種的に云ても地方的に云ても部分的な分業的なカルテルであつたことは之は疑ひを入れぬのであります、それが10年間の組合訓練を経ました揚句、而も今日偶然にも其此處にあります組合に屬して居られる諸君が、皆其時分から矢張り共に働いて居た人の寄合であるのは實に滑稽な位に感ずるのであります、さう云ふ組合訓練を経て居た爲に、割合に此の統制問題に付ても議が早く纏りまして、さうして此の商工省の下に鐵鋼統制協議會、之が商工省の役人と我々とが打て一丸となつた一つの委員



會であります、さうしてそれから原料の統制と生産販賣と消費の統制と。三つに分れて。此處で以て種々の本を決めるのであります。此の方は今の製鋼原料懇話會と屑鐵共買會、之が今度屑鐵會社が出来るさうであります、此の方には矢張りそれぞれの専門家が居られるのであります、私共の主として扱て居りますのは。此の生産販賣の部門でありまして、此處の鋼材聯合會。日本鋼材聯合會と云ふ前の六社の聯合會はたつた六社であります、之は全國の製鐵鋼業 35 社を網羅して居る大きな團體でありまして、其下に半製品。棒鋼。形鋼。鋼板。平板。帶鋼。鋼管。薄板。鋳力と云ふ之だけの販賣組合と。それから鋼塊組合。これはドイツにもありますロースターゲマインシャフトに當ると思ひますが。これ丈の組合を組織して、其下に指定販賣人。三井三菱その他の指定問屋合計 50 店ありますが。有力なる東西團體で全國鋼材商業組合聯合會。全鋼商と申して居りますが。さういふ組合。それから數千店に特約して之が配給の機關であります。此方が配給の機構であります、而して此方の消費統制。之は切符制度であります。此の切符制度に依て、日本鐵鋼製品工業組合聯合會と云ふ大變長い名であります、日本鐵鋼聯と申して居りますが、此の組織で、皆共販の方から出て居る、其の以外の造船であるとか土木、瓦斯と云ふ單獨の構成團體、之が皆其切符を發行する、その下請を道府縣の工聯及び業種別に分けた工業組合聯合會と云ふやうなものがそれぞれありまして、之に依てそれぞれの割當をし切符を配給する、それを此方に持て來ると、此處で以て各種の組合から其切符に應じて物を配給して行く、まあ其表丈御覽になると實に理路整然と種々旨く動いて居るやうであります、實際はまだ本當に充分とは申上げ兼ねますが、兎にも角にも斯うした團體に依て今日の配給が動いて居ると、さうして此の鐵鋼聯盟と云ふのは、曩に申した鐵鋼協議會が變たものでありまして、鐵鋼業者 36、今後 45 になるだらうと思ひますが、それだけの龐大なる團體を資本としましても 10 億を突破しまして、20 億近くの財團が此處に網羅されて居る譯であります。それは相並んで今回の所謂日本鐵鋼協會、之は學術、技術の方を擔當し此方は寧ろそれ以外の方面を擔當して、此間にお互ひに有無相通する地位の分野を定めて進んで居る譯であります、其外に大阪には鐵鋼報國會と云ふものがありますから、之を一寸附加へて置いた譯であります。斯んなやうな風に統制をやつて居る譯であります。其處でもう極く簡單

に結論だけを申し上げますと、先程からすうつとお話したやうに、日本の製鐵業も國際水準の所謂世界列強の一に伍して、少しも引けを取らんと、まあ寧ろ將來は有力なる製鐵國になるだらうと、資源の關係から云ても氣候の關係から云ても充分だと、斯う申すのであります、さて最も此處に大事な問題が一つ残されて居ると思ひます。それは此の日滿支の經濟ブロックを、殊に鐵鋼界に於てどう云ふ風に其間の分野を定めて、さうして國內の需要を充たし、引いては海外に輸出を圖て行くべきか此の問題であります、もっと大きく云へば、一體日本は何の爲に世界の惡たれ小僧になつてまで或は滿洲事變を起し、或は日支事變に進んだかと云ふ問題を考へざるを得ないのであります、先達て=ユルンベルグに於けるヒツトラの演説の一節を一寸見まして、之は後から伍堂さんが色々お話がある點が多いと思ひますが、要するに我々が、即ち所謂持たざる國と稱する獨とか伊とか、ナチが或は東漸し或は南進し、或は西漸すると云ふ意味は、何も我々が求めて人の持て居るものをふん奪らうと云ふ意義ではないのだ、オツタワ會議以來、持てる國たるイギリス、アメリカ其の他の諸國が自分の經濟權益を笠にかけて殊にマーケットを我々の行く手に對し封鎖をする、明かにそれが挑戦なのだ。我々は生きんが爲にどうしても自己の産業を發達させて、さうしてそれに依て人口問題も解決し、失業問題も緩和して進まねばならぬ運命にあるのだ、其處を遮ぎられた、それが挑戦に非ずして何が挑戦であるか、挑戦をするものは我々持ざる國に非ずして持てる國。即ち英米の如きデモクラシーの國家が我々に向て挑戦するのである此處に我々の生きて行く道、所謂聖戰も敢へてする所以があるのだと、まあ此の日本の聖戰に對して云た譯ではないのでありませうが、さうした演説を見出しました、私共も至極同感であります。決して我々は支那と云ふものが持てゐるものを或は滿洲の持てゐるものを奪ひ取る、侵略しやうと云ふ趣意ではなくて、向ふの無爲に持てゐるものを此方に持ち來し、同時に我々が其地方にマーケットを求めると云ふ處に値打がある、然るに相手の國が、其ブロック經濟に相應じて共に立つと云ふ道義的な隣邦相扶ける考へのないのを膺懲するのだと云ふやうに私共考へて居ります譯であります、鐵の問題にしましても、今日幸ひに聖戰の結果日滿支と云ふものがさう云ふ位置に置かれる以上は、今度は日本人同志の相談でありますから、此大目的に外れぬやうな計畫を、少くも製鐵界に於て樹立するに非ずん



ば、何の爲に我々が多くの國債を負擔し、何の爲に尊き人命を失たかと云ふ其大きな事故を忘れ去た結果になるのでありますから、其點は吾人はお互ひに戒しめて小さな自分の事業、野心或は慾望とか云ふものを棄て、眞に大同團結して全體主義として進まねばならぬと、斯う私は考へるのであります、而して若しさう云ふ風に導かれたとしますならば、恰も曾てフォードが自動車を一足の靴よりも安い値段にして見せると、斯う叫んだことを

記憶致しますが、吾人は如何にかして鐵の値をその直接の絶對値に於て木の値よりも土の値よりも安い値段で豊富低廉に提供することが出来るではなからうか、それに依て日本が將來益々東洋に、南洋に、南米に伸びて行く道が開かれるのぢやなからうかと、斯う考へる次第であります、甚だ簡單でありましたけれども、私の講演は之で終ります（拍手起る）

日本鐵鋼協會會長齋藤大吉 只今は日鐵の濫濼常務取締役より過去に於て日本の製鐵事業が如何に貧弱なものであつたか其れが時と共に進歩致しまして今日に於て如何なる状態に立ち到つて居るか又其數年後の昭和 16 年以後に於ては今日の豫定を以てすれば日本の製鐵業はフランスを越へ或は英國を今に越すのではないかと云ふ様なお話を承りまして非常に心強く感ずる次第であります、現今に於ては此日支事變の關係上、私共は日頃鐵材の供給不足に各種の工業が苦しんで居る有様を見まして實に寒心に堪へない次第であります、又最後にお話になりました所謂配合統制或は原料の統制等を御覽になりまして、さうして其間を成るべく圓滑に其鐵鋼の需給の關係をやることに努めて居るらしい有様を拜聽致しま

して今日に於ては私共は如何にしても此不便を忍んで行かなくてはならぬと、さうして數年後に將來日本の製鐵業が大いに伸張致しまして、さうして單に國內の需要を充すのみならず海外に迄でも大いに發展して行かなくてはならぬと云ふことを今のお話に依て悟た譯であります、尙ほ最後には此の日滿支の所謂經濟ブロックと申しますか、それを充分に緊密なる關係にして、さうして之を我々の總ての事業、殊に製鐵事業の發展をして行かなくてはならぬと云ふ様なお話もありまして我々の覺悟に有益なる指針をお教へ下さいましたことに付きまして此席より會員一同を代表し深くお禮を申し上げます（拍手）